

2016年7月19日 Vol.36

任天堂とLINEに関心が集中した株式相場

ブリグジットショック後の株式相場が参院選前の停滞局面を経て急上昇。日経平均はボトムから10%の上昇を示すに至りました。NYダウが堅調に推移し、世界中の株式相場が上昇に向かったことが日本株の上昇を後押し。今回は株高に多少リードされる形で為替相場も6月20日につけた1ドル=99.0円のボトムから7月15日には1ドル=106.3円まで円安に振れ、日経平均の上昇につながりました。

今回の円安、株高の流れをリードした銘柄は日本が世界に誇る任天堂(7974)です。「ポケモンGO」というAR(仮想現実)技術を用いたスマホゲームが米国など海外で大ヒットしていることを買い材料として株価が短期急騰し、「買うから上がる、上がるから買う」の好循環をもたらしたことで、7月6日の13,835円という安値から7月15日には27,800円という高値をつけました。わずか1週間で株価は倍になり時価総額は3.3兆円に膨らんだことで日本のみならず世界中の投資家の関心と呼びに至り、3連休明け以降の株式相場にもインパクトを与えると期待されます。任天堂の株主は3万6655名ですので、その株主の皆さんの懐が急に豊かになった訳です。単元株は100株ですので最低ロットで保有されていてもその投資家の139万円の資産が278万円にまで至ったのですから資産効果は抜群です。もちろん外国人持ち株比率が51%ですので日本の投資家への恩恵は限定されますが、時価総額が1週間で1.6兆円も増えた効果は銀行株などで痛手を受けた個人投資家にとっては久々に明るい話題となったと言えます。

任天堂とともに話題を呼んだのは7月15日にIPOを果たしたスマホ関連のLINE(3938・東証1部)です。こちらの方は公開価格3300円に対して4900円(時価総額1兆円強)で初値がつき、その後5000円の高値をつけましたが、その後は急速に株価が下落。安値4310円まであって終値は4345円となるなど引けにかけ任天堂株人気に押されてしまいました。それでも時価総額は9100億円を超えており、新たな人気銘柄の登場となりました。このように任天堂とLINEに関心が集まった先週の株式市場ですが今週もこうした潮流が続くのか、多少関心が他の銘柄に移っていくか見守ることにしたいと思います。

株式相場は極端に走りがちの世界でもあり、二極化の傾向が見られます。日経平均やTOPIXが直近のボトムから10%近い上昇を示す一方で、代表的な中小型株指数であるマザーズ指数は7月8日の安値941.33に対して7月15日は942.67という安値をつけるなど低迷状態が依然として続いています。市場では中小型株を売却して任天堂や銀行株、東芝などこれまで売り込まれてきた大型主力銘柄に乗り換えようとする動きが活発化しています。こうした動きがいつまでも続くとは思えませんので、為替相場などを睨みながら、市場全体は一旦お休みする場面もあるかと思っています。これに代わって直近になって調整色を強めてきた直近のIPO銘柄やその他新興市場銘柄が

東京 IPO 特別コラム

改めて見直されるタイミングもあるものと期待されます。そうした観点で二律背反の相場ながら好循環の展開に入ったとポジティブに考えていくべきではないでしょうか。

(東京 IPO コラムニスト 松尾範久)